

300号きたいなば、400号とおからず？

飛田雄一

※『むくげ通信』300号（2020年5月31日）より

むくげの会の現メンバー9名のなかでスタートからのメンバーは堀内さんと私のふたりだ。したがってそれなりの分量の原稿を書いていくことになる。最初のころはペンネームを使用することもあった。70年代の初期にはそんな雰囲気もあった。当時むくげの会と同時並行的であったべ平連神戸のニュースなどにはペンネームがもっと多く、自分のペンネームをすぐに忘れてしまって新しいペンネームが登場したりしていた。今や歴史となりつつあるむくげ通信では、後日の研究のためにペンネームの確定作業が必要になるかもしれない。会のリーダー的存在であった佐久間英明さんはペンネームで本名は森川展昭、佐々木道雄さんは道淵信雄である。ここに記録しておく。

●
飛田の名前で最初のころに次のような記事を書いている。時事的なものが多いようだ。

「朝鮮人被爆者孫振斗に見る日韓関係」8号（1971.8）／「朝鮮における日帝植民地時代の「同化教育」」10号（1971.12）／「朝鮮をめぐるニュース1971.11～72.1」11号（1972.2）／「朝鮮をめぐるニュース1972.2～4」12号（1972.6）／「日韓会談」の背景と成立までの過程」14号（1972.5）／研究会報告「土地調査事業」と産米増殖計画」について」16号（1973.1）／「寸評・幼稚園児の唄」17号（1973.2）／「映画批評「花を売る乙女」を観て」18号（1973.5）

定例会は毎週のようにもたれていて、同じ本を読んだり、共通テーマを決めてお互いに報告したりするスタイルが多かった。そのテーマは以下のようなものだ。

「日韓会談」（1972年）、「関東大震災と朝鮮人虐殺」（1973～74年）、「東亜日報の広告弾圧」（1975年）、「光州学生運動」（1984～85年）

この共同テーマでの研究はその後、各自がそれぞれのテーマで研究するようになり、なくなった。

●
通信の私にとっても効用はいろいろある。そのひとつが、「使いまわしてアルバイト」だ。定例会で発表をして、時には青丘文庫研究会でも同テーマで発表してから通信に書く。それを更に『季刊三千里』に書いて原稿料をいただいたことがある。三千里は私のようなものが書いても原稿料をくださった。400字一枚2000円だ。20枚書いたら4万円、原稿料などもらったことがないので、びっくりし、喜んだ。

三千里のそのような姿勢はすごい。わが通信にそんな姿勢はない。

「入管令改正をめぐって」（65号～68号、1981.3～9）、「戦後の外国人登録制度と指紋制度」（73号、1982.7）、「明川農民組合の活動」（85号、1984.7）、「GHQ下の在日朝鮮人の強制送還」（92号、1985.9）、「阪神大震災と外国人一オーパーステイ外国人の治療費・弔慰金をめぐってー」（148-149合併号、1995.3）などである。（阪神大震災・・は『季刊青丘』）

一方、わが通信には執筆は会員の権利という考え方がある。むくげの会は政治結社のよう（?）、会費が月額4000円とする。その会費で学生センターの会場費・家賃を支払い、出版・通信発行などを行っている。したがって会費を払っている会員に原稿を書く権利があるのである。外部の方に原稿依頼をすることもあるが、それは会員による編集会議で決められるのである。ときには掲載依頼原稿もくることがあるが基本的に断っている。もちろん原稿掲載のために会員となることは大歓迎だ。

●
今回の会員9名の文章に山根さんの提案で、自身が選ぶ5選を書くことになっている。私は以下の5つとしたい。

- 1) 「隨想・濟州島行」84号、1984.5
- 2) 「權域75 朝鮮の胡麻」98号、1986.9
- 3) 「延辺朝鮮族自治州への旅」109～110号、1988.7～9
- 4) 「金英達さんとの出会い」181号、2000.7
- 5) 「クルーズ（ダイアモンドプリンセス）で釜山に行ってきました」271号、2015.7

●
さて、むくげ通信300号を個人的に振り返って、いちばん恩恵を受けたのはだれかと考えてみると。すると、それは私だ。私はここ3-4年で本を4冊でしたが、いずれも中身はすべてどこかに発表したものだ。新しく書いたのは、まえがきとあとがきだけだ。故飯沼二郎先生の教え、「完成品を求めてはいけません。まずそのまでいいからだしたらいいんです」（自信のない要約だが）にしたがってどんどんだしたのだ。その再録のおそらく半分以上はむくげ通信だ。毎号毎号、期限を決められての原稿は精神衛生上悪いことわざがあったが、そのおかげで文章が残っているのである。これが私にとっての最大の効用だ。

ここ数年、300号はいつのことだと度々話題になっていた。が、それが簡単にきてしまった。1年6号、10年で60号、400号までとするとあと17年、2037年だ。まあそれはないだろう。